『無名抄』伝本考

木下　華子

はじめに

『無名抄』は鴨長明の手になる和歌随筆である。成立は、「関清水事」の段に「建暦の初の年十月余りの比、三井寺へ行く」という叙述があることから、建暦元年（一二一一）一一月以降と見られるが、全体で約八〇段もの歌話を収めることを考えると、長期間にわたって執筆されたものと推測される。内容は、詠歌の心得・歌体論といった歌論書的なもの、歌枕・和歌の故実といった歌学書的なもの、同時代の歌人の逸話といった説話的なものと多岐にわたり、後鳥羽院の和歌所寄人でもあった長明の和歌との関わりを知る上でも、同時代の歌壇や歌人たちの有り様を捉えた資料としても、重要な作品である。

『無名抄』の伝本は、最古本である東京国立博物館蔵梅沢記念館旧蔵本（以下、「梅沢本」）の他、天理図書館蔵呉文炳氏旧蔵本（以下、「呉本」）、天理図書館蔵竹柏園旧蔵本（以下、「竹柏園本」）、静嘉堂文庫蔵本（以下、「静嘉堂本」）等の写本、寛政二年（一七九〇）・文化九年（一八一二）の刊本など多くのものがあるが、諸本間には異本といえるほどの大きな差はない。現在、梅沢本と呉本の二本が書写年代も鎌倉時代と古く、すぐれた古写本とされている[1]が、日本古典文学大系『歌論集能楽論集』所収本が静嘉堂本、朝日古典全書『方丈記』所収本と歌論歌学集成七巻（三弥井書店）の所収本が呉本、日本歌学大系三巻の所収本が竹柏園本を底本とし、『鴨長明全集』（貴重本刊行会）が梅沢本の翻刻を収めることからもわかるように、これまで体系だった伝本研究は

行われておらず、様々なテキストが流布しているのが現状である。本稿は、このような『無名抄』の伝本と系統の問題に対して、調査の結果を報告するものである。

一　『無名抄』の諸本

『国書総目録』に載る『無名抄』の伝本は、約四〇本の写本と三種類の板本である。本稿では、先行研究を参照しつつ、主要と思われ、稿者が本文全体の異同を確認したもの一四本（写本一三本、板本一本）を主として取り上げる。以下に一四本の簡略な書誌を述べるが、その過程で管見に入った五本を加え、全体では一九本を考察の対象とした。

（1）東京国立博物館蔵梅沢記念館旧蔵本［函架番号：三一八一］―「梅沢本」「梅」と略称―

（『復刻日本古典文学館』の複製による）

重要文化財指定。復刻日本古典文学館シリーズ（日本古典文学会）の一冊として複製があり、『鴨長明全集』に全文翻刻と影印が収められている。以下、久保田淳氏による復刻日本古典文学館の解題により摘記する。写本一冊。列帖装（六折）。桐箱に収められており、「無名抄　鴨長明真筆」と打ちつけ書きで墨書。本書は縦二四・七糎、横一六・二糎。表紙は本文料紙と共通で斐紙。外題・内題なし。墨付八三丁。末尾の遊紙が後表紙と見なされる。一面の行数は概ね一〇行（八行～一一行の範囲内）。和歌は改行し、概ね二字下げ、一首を上句・下句に分けて二行に記す。章段の区切りは朱の合点で示す。目録はなく、見出しは漢字片仮名交じりで朱書。一行を取る場合がほとんどだが、行間に細く書かれる場合もある。この見出しは本文と同筆と見られる。奥の遊紙の上に「墨付八十三枚」と記した、縦一三・二糎、横二・二糎の美濃紙が貼り付けられている。奥書はないが、鎌倉時代の書写。

（2）天理図書館蔵呉文炳氏旧蔵本［函架番号：九一一・二　イ二一七］―「呉本」「呉」と略称―

（呉文炳著『国書遺芳』による）

呉文炳著『国書遺芳』に写真版で全文が収められ、吉田幸一氏による解題が添えられている。また、朝日古典全書『方丈記』所収本と歌論歌学集成七巻所収本の底本である。以下、『国書遺芳』と小林一彦氏による歌論歌学集成第七巻の解題によって摘記する。写本一冊。胡蝶装（九折）。縦二二・八糎、横一五・七糎。表紙は古代裂濃茶地に薄茶唐草模様、中央に題簽「無名抄」とある。内題、「無名抄」。料紙は鳥の子。墨付九八丁。一面九行。和歌は改行し、二字下げ、一首を上句・下句に分けて二行に記す。目録はな

く、見出しは一行を取って書く。全体に擦り消しや重ね書きによる本文の訂正が見られる。奥書はないが、書写年代は鎌倉期を下らない。

（3）東京大学総合図書館蔵阿波国文庫本［函架番号：E三一・六八四］―「阿波国本」「阿」と略称―

平成九年度～一一年度科学研究費補助金研究報告書『日本古典文学におけるモチーフインデックス化とその索引データベース化の研究』附載阿波国文庫本『無名抄』翻刻及び索引（研究代表者小島孝之　平成一二年三月）に全文の翻刻が載る。写本一冊。袋綴。縦二七・七糎、横一九・七糎。栗皮色の紙表紙の中央に「無名抄」と書かれた題簽を貼付。題簽は黄地に金砂子散らし、金泥で薄を描く。料紙は楮紙。墨付六八丁。前後に各一丁の遊紙がある。一面一〇行。和歌は改行し、一字上げで、一首一行書き。目録はなく、見出しは漢字片仮名交じりで、章段のはじめの行間に書き入れられる。奥書はないが、江戸時代中期頃の書写か。巻頭に、「陽春／廬記」「南葵／文庫」「阿波国文庫」の三つの朱印がある。

（4）天理図書館蔵竹柏園旧蔵本［函架番号：九一一・二・イ八九］―「竹柏園本」「竹」と略称―

（『天理図書館善本叢書』和書之部四四巻による）

『天理図書館善本叢書』和書之部四四巻に影印版で全文が収められ、解題が添えられている。また、日本歌学大系三巻の所収本の底本である。以下、『天理図書館善本叢書』によって摘記する。写本一冊。列帖装（五折）。「無名抄古寫本」の題簽をもつ帙に収められている。縦二三・五糎、横十四・五糎。外題（直書き）、「長明無名抄」。表紙右下に同筆で「尊（興）」とある。見返し右下に「傳領賢紹」と墨書。内題なし。墨付六六丁。一面の行数は概ね九～一〇行（八行・一一行の面もあり）。和歌は改行し、二字下げで一行書き。目録はなく、見出しは一行を取って書く。見出し・本文全て、漢字片仮名交じりである。末尾に以下の奥書を有す。

應安四年辛亥三月立筆了　助筆尊任
老比丘尊興
此本ハ同朋宝蔵房維園法印書也先年書写處
不終功経年序為後学少生又新書写之

これによると、本書は南北朝期応安四年（一三七一）の書写本であり、奥書および表紙に「尊興」と記されていることから、尊興が書写主体者・所持者であったと考えられる。表紙・奥書と本文は別筆と考えられるので、本文書写が尊任、表紙・奥書と本文中の校異・補入が尊興と推定さ

れる。また、奥書三行目からは、維圓法印の本を尊興が写しはじめたが中絶してしまったので、応安四年三月に改めて尊任に書写させたものか。見返しにあるように、この本を伝領したのは賢紹であるが、尊興・尊任・維圓・賢紹ともに不詳。

（5）東京大学総合図書館蔵相良為続筆本［函架番号：E三一・六八六］―「相良本」「相」と略称―

写本一冊。袋綴。縦二四・四糎、横一七・一糎。表紙は渋を刷いた陸奥紙で、中央に「無名抄」と書かれた鳥の子紙の小短冊の題簽を貼付。内題、「無名抄」。料紙は楮紙。墨付七五丁。一面九行。和歌は改行し、約半字下げて一首を一行に書く。目録はなく、見出しは本文中に一行を取って書く。末尾に以下の奥書を有す。

写本云
鴨長明抄云々
元亨四年五月十八日於久我殿御壇所書了
梁心之本をうつす也
主藤原為続

さらに、この裏に、鳥子紙に記した以下の内容の極め書が貼付されている。

無名抄
相良左衛門尉為続正筆
新蒐玖波集作者手跡徹書記門人

これによると、元亨四年（一三二四）に久我殿の御壇所で書写された本（乃至はそれを親本とするもの）を梁心が所持しており、それを相良（藤原）為続が書写したものが本書となる。相良為続（一四四七～一五〇〇）は肥後人吉城主で、新撰菟玖波集作者。巻頭に「南葵／文庫」「陽春／廬記」および読みえない陰刻の三つの朱印がある。また、この奥書は、「於久我殿」以降が多少変化した形で以下の諸本にも見出される。

［一］（5.1）国立公文書館内閣文庫蔵永禄一二年奥書本［函架番号：二〇二―一五］―「永禄本」「永」と略称―
「鴨長明抄云々／本云／元亨四年五月十八日　於久我殿御垣所書之／永禄十二年四月十日書之／源直頼（花押）」

［二］（5.2）天理図書館蔵平仮名本［函架番号：九一一・二・イ一二三］―「天理本」「天」と略称―

（5.3）国立歴史民族博物館蔵高松宮家伝来禁裏本［函架番号：H六〇〇―一二三一］
―「高松宮本」「高」と略称―
「鴨長明抄云々／本云／元亨二二年五月十八日於久我殿」
天理本は『天理図書館稀書目録』に拠ると室町末期の

書写、高松宮本は明和八年玉函の書写である。

それぞれを見比べると、[一]の「御垣所」では意味が通じず、また、[二]の状態から「御壇所」の語が付け加えられて相良本の形になったとは考えにくい。現存するこの系統の諸本の中で、最も古いものが相良本であることも考慮に入れれば、相良本に見える「御壇所」がそもそもの形だったと思われる。

（6）国立公文書館内閣文庫蔵林羅山旧蔵本［函架番号：二〇二―一三］―「内閣本」「内」と略称―

写本一冊。袋綴。縦二六・五糎、横一九・七糎。無地薄茶色の紙表紙で、左肩に「無名抄」と打ち付け書き。外題右肩に読み得ない朱の書き入れがある。扉題、「無名抄」。料紙は楮紙、匡郭と界線が引かれた紙を用いる。墨付五五丁。一面一二行。和歌は改行せず、本文中に詰めて書く。目録・見出しはなく、章段の区切りは朱の合点で示す。本文中に和歌の一部が呈示される場合や、関連する和歌が存在する場合、行間に歌一首を朱で注記する。奥書はないが、江戸時代初期の書写か。表紙右肩に「昌平坂／学問所」の印、扉に「林氏／蔵書」「浅草文庫」「日本／政府／図書」の各朱印、巻末に「昌平坂／学問所」の印と「江雲渭樹」の朱印がある。よって、本書は林羅山（一五八三～一六五七）の旧蔵本であることがわかる。

（7）筑波大学附属図書館蔵本［函架番号：ル二〇五―一三八］―「筑波本」「筑」と略称―

写本一冊。袋綴。縦二三・二糎、横一六・三糎。紺と練色の打曇り表紙で、左肩に「鴨長明無明抄」と書いた金揉箔散らしに薄が描かれた小短冊の題簽を貼付。目録題、「無名鈔」。料紙は楮紙。墨付九四丁。一面八行。和歌は一字上げて、一首を一行に記す。巻頭に目録を有し、本文中にも一行を取って見出しを書く。見出しの上に「一」と記し、右肩に通し番号をふる。「題可意得事」から「範兼家会優事」までは朱点・朱線が施されている。巻頭に「岡田眞／之蔵書」「石□□正／図書之記」（□は字と重なって判読不能）の朱印、巻末に読み得ない陽刻の朱印がある。末尾に以下の奥書を有す。

此鴨明抄はかもの長明入道か作也たかつかさの前の殿より
東宮へまいらせらるゝを給りて書写侍也下さるゝ時の仰
に云此抄并後鳥羽院都の外にてあそはさるゝ御抄
とは御秘蔵の物也すへて人に見せられすしかれともこ
とにおほしめさるゝ子細有により御免あり本主前関白い
そき申さるいまた御書写なしはやく書件の写本にて
のとかにあそはさるへしとそ

弘安七年十二月九日
或人の本には無明抄云々御本の説につきて鴨明抄と
書畢正応五年九月宰相典侍経子にゆるし侍中風にて
手わなゝきいへるほとにいよ〳〵鳥の跡乱侍めり
同年神無月十六日　前参議　在判

さらに、扉には古筆鑑定家・朝倉茂入の極め札が貼付られている。

由己　無明鈔目録ノ発端半枚又一枚半筆
圭韵　右之外ハ上ノ一筆也

これによると、本書の書写者は大村由己と圭韵の二人。冒頭の一・二丁のみが由己でそれ以外は圭韵の筆ということになる。大村由己（一五三六～一五九六）は、豊臣秀吉の右筆で軍記作者・連歌作者でもあった人物。圭韵は不詳。また、奥書に見えるように、本書は鷹司基忠（たかつかさの前殿・前関白）から後の伏見天皇（東宮）に進上された本を、弘安七年（一二八四）に飛鳥井雅有（前参議）が書写したという系統のものである。さらにその本は、正応五年（一二九二）、伏見天皇の内侍であった藤原経子（宰相典侍経子）に許されたとあり、伏見天皇の周辺での『無名抄』の享受を示すものとなっている。

この奥書は、

（7.1）宮内庁書陵部蔵松岡本［函架番号：二〇六―五九九］―「松岡本」「松」と略称―

（7.2）山口県立図書館蔵本［函架番号：五九］―「山口本」「山」と略称―

にも見出され、一つの系統を成すと考えられる。[2] なお、山口本には契沖による朱の書き入れが施されている。

（8）岩国徴古館蔵本［函架番号：一八―一六］―「岩国本」「岩」と略称―

写本一冊。袋綴。縦二五・九糎、横一九・七糎。薄茶色の紙表紙で、左肩に「無名抄 鴨長明作」と記した明るい朱色の題簽を貼付。料紙は楮紙。墨付六五丁。巻頭に一丁分の遊紙がある。一面一一行。和歌は二字下げで、一首を上句・下句に分けて二行に記す。目録はなく、本文中に一行を取って見出しを書く。歌人等固有の人物名に対し割り注を施す。末尾に以下の奥書を有す。

慶長四年八月三日一校了
同十一日再校了給歟

書写者は不明、慶長四年（一五九九）の書写である。

（9）静嘉堂文庫蔵本［函架番号：二〇一八三・一・五〇二・一八］―「静嘉堂本」「静」と略称―

写本一冊。袋綴。縦二五・四糎、横一八・五糎。薄い紺

色の紙表紙。題簽が剥落した跡に「無名抄」と打ち付け書き。料紙は楮紙。墨付八四丁。一面九行。和歌は一字下げて記す。一首を一行に記す、一首を上句・下句に分けて二行に記す、一首を二行に記すが後ろの本文を追い込んで書く、の三通りがある。目録・見出しはないが、章段毎に改行。「琳賢基俊をたはかる事」の章段までは、旧蔵者の松井簡治博士のものかと思われる鉛筆の書き入れがある（頭注部分に見出し、行間に別本の本文の書き入れ・読み仮名・濁点等）。奥書はないが、江戸時代初期の書写。巻頭に「静嘉堂現蔵」「松井氏／蔵書印」の二つの朱印と「八雲軒」（陰刻）の藍印、巻末に「藤原」（陰刻）と「安元」（陽刻）の二つの藍印がある。従って、本書は大洲藩主脇坂淡路守安元（一五八四～一六五三）の旧蔵本である。

（10）蓬左文庫蔵本［函架番号：一〇七―四六］―「蓬左本」「蓬」と略称―

写本二冊。袋綴。縦二三・三糎、横一六・二糎。内曇りの鳥子守表紙で、上冊は中央に「無名抄上」と記した鳥子紙小短冊の題簽を貼付。下冊は題簽が剥落したあとに、墨で「異名抄」（「異」を朱でミセケチ、右に「無」と朱書）と打ち付け書き。目録題、「無名抄」。料紙は楮紙。墨付は上冊が四七丁、下冊が四三丁。一面九～一〇行。和歌は概ね二字下げで上句を一行に書き、下句は本文と同じ高さに記して、後ろの本文を追い込んで書く。上冊の巻頭に目録をまとめて掲げるが、順番が混乱している。見出しはないが、章段毎に改行し、冒頭に「一」と記す。本文中の空白や貼紙が存在する。末尾に以下の奥書を有す。

本云

永享十一年七月十四日書功畢狂言綺語

仏乗因転法倫胤而已

永正十三年七月廿三日書写畢吉祥

これによると、本書は永享一一年（一四三九）書写の本を永正一三年（一五一六）に写したものである。

（11）ノートルダム清心女子大学黒川文庫蔵本［函架番号：G一二九］―「黒川本」「黒」と略称―

写本一冊。袋綴、料紙の天地を糊で貼り合わせている。縦二二・五糎、横一六・五糎。薄茶色の紙表紙の上に薄様の紙を貼る。表紙の左肩に「長明無名抄　飛鳥井栄雅筆」と打ち付け書き。料紙は楮紙。墨付七一丁。一面一一行。和歌は二字下げで、一首を上句・下句に分けて二行に記す。目録はなく、見出しは漢字片仮名交じりで朱書。一行を取るものと行間に細く書かれるものとがある。この見出しは本文と同筆と見られる。章段の区切りは朱の合点で示す。な

お、最終の二丁分は料紙・筆ともに別であり、見出しも墨書。末尾に「右此一帖ハ飛鳥井栄雅卿筆也」との識語があり、本書は飛鳥井雅親（法名栄雅、一四一六～一四九〇）の書写本ということになる。巻頭に「黒川真前蔵書」「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」「仁和寺／皆明寺」の四つの朱印がある。

（12）多和文庫蔵本［函架番号：五・九］―「多和本」「多」と略称―

写本一冊。袋綴。縦二六・三糎、横一九・一糎。渋皮色の紙表紙で、左肩に「無名抄」と書いた白地に淡墨と青の墨流しが施された小短冊の題簽を添付。題簽の右肩には、巻子の軸に「このかみたはのふくらにをさむ」と記す形の、多和文庫創始者松岡調による朱印が捺されている。料紙は楮紙。墨付六〇丁。巻頭に一丁の遊紙がある。一面一一行。和歌には合点を付すが、改行はせず、本文中に詰めて書かれる。目録・見出しはなく、章段毎の改行もない。全体に朱点・朱引が施されている。巻頭に「香木舎文庫」（朱）、「多和／文庫」（青紫）、「集古／清玩」（緑）の印がある。末尾に以下の奥書を有す。

本云

周櫶本承知所持則置重而書写

元亀第四六月一八日書之

守硯子　宗徳

本書の親本は、元亀四年（一五七三）に、承知所持の周櫶本を宗徳が書写したものであるが、本書自身は江戸時代の書写と思われる。周櫶・承知・宗徳は不詳。

（13）宮内庁書陵部伏見宮文庫蔵本［函架番号：伏・一二八］―「伏見宮本」「伏」と略称―

写本一冊。袋綴。縦一四・〇糎、横二〇・〇糎。紺地の紙表紙で、左肩に「長明無名抄」と書いた白地に銀箔を散らした小短冊の題簽を貼付。内題、「長明無名抄」。料紙は薄様の楮紙。一面一一行。和歌は一字下げで、一首を上句・下句に分けて二行に記す。目録・見出しはなく、章段毎に改行し、冒頭に朱で丸印を付ける。末尾に以下の奥書を有す。

本云

正和元年五月廿九日以大納言法印定為自筆本書写之

同六月七日校合訖

明応庚申二月中旬染筆

弓藝

慶長四年八月写之一校訖

享保十五庚戌年
六月八日　写之　祐公
享保十六年辛亥
十一月中旬写之　　専好
池坊老僧

これによると、本書のそもそもの親本は、二条為氏息で二条派の歌僧であった定為の自筆本である。それを、定為存命中の正和元年（一三一二）に書写し、そこから明応九年（一五〇〇）、慶長四年（一五九九）、享保一五年（一七三〇）と三度に渡って転写され、享保一六年（一七三一）に華道家元である池坊の第三世専好（一六八〇～一七三四）によって書写されたものが本書となる。

（14）三手文庫蔵今井似閑奉納本［函架番号：哥―弐A―三三七］―「三手本」「三」と略称―

板本合一冊。袋綴。渋みがかった藍色の紙表紙で、左肩に「無名抄」と打ち付け書き。縦二六・六糎、横一九・二糎。内題・目録題ともに「無名抄」。料紙は楮紙。墨付八一丁。一面一一行。和歌は概ね二行下げで、一首を上句・下句に分けて二行に記す。本来は巻頭に最初（「題心」に相当する段には見出しがない）から「俊成入道物語」までが上冊、「頼政哥道にすける事」から「とこねの事」までが下冊であったが、それを一冊に合綴している。そのため、目録はそもそもの冊の冒頭に位置している。見出しは一行を取って書く。本文末尾に以下の奥書を有す。

鴨長明抄云々
本云
元亨二二年五月十八日於久我殿　　婦屋仁兵衛

よって、本書は婦屋仁兵衛板ということになるが、「鴨長明抄云々／本云／元亨二二年五月十八日於久我殿」は（5）相良本の系統の書写奥書と一致する。板本の『無名抄』には、本書のような刊記不明のものの外に、寛政二年（一七九〇）と文化九年（一八一二）の二種類の版があるが、「　」内の部分はどちらの版にもある。なお、板本は全て同版（ないしは覆刻）であるため、三手本に代表させて検討する。

また、本書には、全体を通して朱で別系統の本文が書き入れられている。これは、旧蔵者であった今井似閑の手によるものだろう。この書き入れは、（7.2）山口本の本文とそこに施された契沖による朱の書き入れに一致する。[3] 覚え書きのようなものの表記までもが一致するので、今井似閑が参照した本は、師であった契沖の書き入れ本＝山口本であったことは間違いない。即ち、三手本の書入本文は（7）の系統のものということになる。なお、一丁目の袋の中に

折り畳んだ紙が一枚入っており、多少の異同[4]はあるものの、（7）の奥書と同じものが書かれている。

二　奥書と章段

『無名抄』には、成立過程に大きく関係するような異本は指摘されていない。しかし、諸本を見比べていくと、いくつかの系統に分類を行うことが可能である。

先ず、奥書をもとに仮分類を施そう。先述したように、奥書からは二系統を抽出することができる。

・「元亨四年五月十八日於久我殿」を含む奥書を有する

――相良本・三手本・永禄本・天理本・高松宮本

・「此鴨明抄は」に始まって、「弘安七年」「正応五年」の年次を含む長文の奥書を有する

――筑波本・三手本書入本文・松岡本・山口本

以後、前者を元亨四年奥書本、後者を弘安・正応年間奥書本と呼ぶこととする。それ以外の諸本については、章段の区切り方と見出しの付し方によって、さらなる分類を施すことができる。見出しは後人の手によるものと思われる4が、鎌倉期の古写本である呉本が一行を取って見出しを記すことから見ても、かなり早い段階から存在したと考えられる。従って、伝本を整理するには有効だと判断した。

以下、章段に関する主要な異同一〇箇所を①～⑪として掲げ、それを表にしたものを後ろに載せた。三手本と山口本は、朱の書き入れに従った場合を「三手書入」「山口書入」として別に挙げた。見出しを持たない内閣本・静嘉堂本・多和本・伏見宮本・高松宮本、巻頭に目録を持つものの順序が混乱している蓬左本については対象から外している。

①「題心」の見出し。

②「我与人」の見出し。

③「頼政哥俊恵選事」と「ニホノウキス」の分割（二章段に分割＝〇、一章段に統合＝×）。

④「マスホノス、キ」の見出し。

⑤「俊頼基俊イトム事」、「腰句ノ終ノテ文字難事」、「琳賢基俊ヲタハカル事」の区切り方（三章段に分割＝〇、「琳賢基俊ヲタハカル事」を切り離して二章段に分割＝△、一章段に統合＝×）。

⑥「黒主神ニ成事」の見出し。

⑦「エノハ井」の見出し。

⑧「隠作者事」の見出し。

⑨「近代哥躰」の見出し。

⑩「新古哥」の見出し。

⑪「業平本鳥キラル、事」と「ヲノトハイハシトイフ事」

の分割（二章段に分割＝〇、一章段に統合＝×）。

相良	呉	竹柏園	黒川	梅沢	
ナシ	ナシ	題心	題心	題心	①
我与人	我与人	我与人	我与人	我与人	②
×	×	〇	〇	〇	③
ますほのすゝき	ますほのすゝき	マスホノス丶キノ事	マスホノス丶キ	マスホノス丶キ	④
〇	〇	〇	〇	〇	⑤
黒主神に祝事	黒主神に祝事	黒主神ニナル事	黒主神ニ成事	黒主神ニ成事	⑥
ゑのは井事	えのはゐ事	エノハ井ノ事	エノハ井	エノハ井	⑦
隠作者事	隠作者事	作者ヲカクス事	隠作者事	隠作者事	⑧
近代古躰	近代古躰	近代謌躰	近代哥躰	近代哥躰	⑨
取古哥	取古哥	新古今哥イ	新古哥	新古哥	⑩
×	〇	×	×	〇	⑪

筑波	阿波国	天理	永禄	三手	岩国	
題可意得事	題ノ心	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	①
小因幡哥事	我与人	我与人	我与人	我与人	我与人	②
○	○	×	×	×	×	③
十寸穂薄事	薄ノ三名ノ事	ますほのすゝき	ますほのすゝき	ますほのすゝき	ますほのすゝき	④
×	○	○	○	○	○	⑤
黒主成神事	黒主神ニナル	黒主神に祝事	黒主神に祝事	黒主神に祝事	黒主神に祝事	⑥
榎葉井事	エノハ井トヨラノ寺	ゑのは井の事	ゑのは井の事	ゑのは井の事	えのは井事	⑦
作者密判事	隠作者事	隠作者事	隠作者事	隠作者事	隠作者事	⑧
近代哥躰事	近代ノ哥躰	近代古躰	近代古躰	近代古躰	近代古躰	⑨
ナシ	新古哥取事	取古哥	取古哥	取古哥	古哥をとる	⑩
×	○	×	×	×	×	⑪

山口書入	山口	松岡	三手書入
題可意得事	ナシ	題可意得事	題可意得事
小因幡哥事	我与人	小因幡哥事	小因幡哥事
○	○	○	○
十寸穂薄事	十寸穂薄事	十寸穂薄事	十寸穂薄事
×	△	×	×
黒主成神事	黒主成神に祝	黒主成神事	黒主成神事
榎葉ゐ	榎の葉ゐの事	榎葉井事	榎葉事
作者密判事	作者密判事	作者密判事	作者密判事
近代哥躰事	近代哥躰事	近代哥躰事	近代哥躰事
ナシ	取古哥	ナシ	ナシ
×	×	×	×

まず、①を見よう。冒頭の章段の見出しの付し方が三つに分かれている。

（ア）「題心」＝梅沢本・黒川本・竹柏園本・阿波国本

（イ）見出しナシ＝呉本・相良本・岩国本・三手本・永禄本・天理本・山口本

（ウ）「題可意得事」＝筑波本・三手書入・松岡本・山口書入

一旦、（ア）を梅沢本系統、（イ）を呉本系統と名付ける。（ウ）は弘安・正応年間奥書本であるから、そのまま呼称する。

①と同様の特徴は⑩にも見える。

⑩梅沢本系統＝新古哥　　呉本系統＝取古哥

弘安・正応年間奥書本＝ナシ

梅沢本系統と呉本系統については、③⑥⑨にもその差が明らかである。

③梅沢本系統＝二章段に分割　呉本系統＝一章段に統合
⑥梅沢本系統＝黒主神ニ成事　呉本系統＝黒主神に祝事
⑨梅沢本系統＝近代哥躰　呉本系統＝近代古躰

この時、弘安・正応奥書本は梅沢本系統に含まれる。しかし、弘安・正応年間奥書本は他にも、②⑤⑧に独自性を見て取ることができる。②「小因幡哥事」⑧「作者密判事」はこの系統に独自の見出しであり、⑤では三つの章段を一括して「腰句手文字事」という見出しを付す。従って、弘安・正応年間奥書本は、やはり一つの系統として考えてよいだろう。

また、④⑦⑩に目を向けると、阿波国本も独自の見出しを有することがわかる。④は阿波国本のみが「薄ノ三名ノ事」、⑦も阿波国本のみが「エノハ井トヨラノ寺」と「トヨラノ寺」という要素を加えている。⑩は「新古哥取事」として、梅沢本系統と呉本系統を混ぜたような形となっている。これらのことから考えて、阿波国本も独立した系統として考えたほうがよさそうだ。

ここまでの検討により、諸本には、梅沢本、呉本、弘安・正応年間奥書本、阿波国本の四つの系統が存在するという見通しが得られよう。また、見出しを立てない諸本のうち高松宮本は、目録と章段毎の改行を確認する限り、相良本と同様である。従って、章段のレベルでは、元亨四年奥書本は全て呉本系統に含まれることになる。なお、山口本は弘安・正応年間奥書本だが、①②⑩は呉本系統、③④⑦⑧⑨は弘安・正応年間奥書本と一致、⑥は「黒主成神に祝」となり、両系統が混ざったような形である。先の（イ）では呉本系統に含まれたが、奥書のことも併せて考えると、弘安・正応年間奥書本に含め、その中でも呉本系統に近いとするのが妥当だろう。

ところで、見出しを持つ諸本のうち、本文が漢字片仮名交じりである竹柏園本をのぞくと、漢字片仮名交じりの見出しを付すのは、梅沢本・黒川本・阿波国本である。さらに⑪を見ると、「業平本鳥キラル、事」と「ヲノトハイハシトイフ事」を分割するのは、梅沢本・呉本の古写本の他は阿波国本のみとなる。この部分の梅沢本の本文は、「をのとはいはしすゝきおひけり／とそつけゝるそのゝをは……」となっており、「をのとはいはしすゝきおひけり」の右肩に朱の合点を付し、右の行間に見出しを朱書する。呉本は、「をのとはいはしすゝきおほたり／とそつけゝる」の後ろに一行を取って見出しを記す。梅沢本・呉本は分割の位置が異なるわけだが、阿波国本の見出しの位置は梅沢本と同じである。つまり、阿波国本は梅沢本に近い古態を留めている

可能性があるのではないか。このことを併せて指摘しておきたい。

三　本文

続いて、本文の分析に移る。以下、主要な異同箇所をA～Yとして掲げ、それを表にしたものを後ろに掲げた。該当箇所の章段名・丁・本文は梅沢本に拠って挙げる。梅沢本にない部分は、後ろにそれぞれ呉本・阿波国本・筑波本の本文を挙げ、（　）内に略称を記した。表では、傍線部の有無を○×で表している。なお、表の見やすさを優先したため、丁番号と掲出順が前後する箇所がある。

A「題心」2オ　これらはをしへならふへき事にあらす（梅）
・又かすかにて優なる文字ありこれらはおしへならふへきことにあらす（呉）

B「題心」3オ　初雪なとをはまたす（梅）
・はつゆきなとをはまつこころをよみてしくれあられなとをはまたす（呉）

C「セミノヲカハノ事」11オ　いしかはやせみのおかはのきよけれは月もなかれをたつねてそすむ（梅）
・光行賀茂社哥合とてし侍しとき予月の哥に
いしかはやせみのおかはのきよけれは月もなかれをたつねてそすむ（呉）

D「不可立哥仙之由教訓事」14オ　さはあれと所〳〵にへつらひありきて（梅）
・さはあれと、ころ〳〵にへつらひありきて人にならされたちなは哥にとりて（呉）

E「井テノ山フキ並カハツ」19ウ　なにともなくなんかりて侍る（梅）なにともなくかりとり侍し（呉）
・なにともなくかりとり侍しほとにいまはあともなくなむなりて侍る（阿）

F「静縁コケウタヨム事」41オ　我ひか事はきらめ（梅）
・わかひか事をおもふか人のあしく難し給ふか事はきらめ（呉）

G「近代哥躰」67オ　すへて哥口伝髄脳なとにもかたき事ともをは（梅）
・すへて哥のすかたは心えにくき事にこそふるき口伝髄脳なとにもかたき事ともをは（呉）

H「題心」3オ　又鹿のねなとは聞に物心ほそくあはれなるよしをはよめともまつよしをはいともいはすか様の事ことなる秀句なとなくはかならすさるへし（梅）

I「セミノヲカハノ事」12オ　さやうに申て侍りしなりこれすてに老のくうなりとなむ申侍し（梅）

J「女ノ哥ヨミカケタル故実」31ウ　ふかくおもふそといふ心にもまたうしつらしといふ心にも（梅）

K「女ノ哥ヨミカケタル故実」32オ　心つきなきよしにいひたらんにこそ心をやりたる（梅）

L「近代哥躰」67ウ　ふかくしのひたるけしきをさよとほの〳〵みつけたるは（梅）

M「哥風情似忠胤説法事」16ウ　あへてよまれんとなんかたり侍し（梅）

・あへてよまれんとなんかたり侍し能〳〵はからひとりなを〳〵風情をたしなむへきか（筑）

N「関ノ清水」21オ　あさりたいめして（梅）

・阿闍梨に対面していひけれは（筑）

O「案過テ成失事」39オ　愚詠の中に（梅）

・哥の感過ぬれは失となる事あり愚詠の中に（筑）

P「為仲ミヤキノ、萩ヲホリテノホル事」79ウ　のほりけれは（梅）

・都まてさかりなるへき比をはからひてのほりけれは（筑）

Q「隔海路論」5ウ　野をへたつる恋にも山をへたつる題にももしは里をへたて河をへたつるにももちゐんとやする（梅）

R「セミノヲカハノ事」11ウ　又あらためて顕昭法師に判せさせ侍し時（梅）

S「アサモカハノ明神」22ウ　神になれるとなんいひつたへたるいとけふあること也（梅）

T「哥詞ノ糟糠」37オ　たゝうき世のはかなさをといはまほしき也（梅）

U「案過テ成失事」40オ　をのつからいてくる物なれはほとにつけつゝもとめうることもあれと（梅）

V「範兼家会優ナル事」45ウ　かひ〳〵しき心地していさましくなんありし（梅）

W「式部赤染勝劣事」57ウ　哥のかたは式部さうなき上手なれと身のふるまひもてなし心もちゐなとのあかそめには（梅）

X「俊恵定哥躰事」70オ　いかにもまことのおほきなるいしにはをとれるやうに（梅）

Y「業平本鳥キラル、事」81オ　かのとくろのめのあなよりすゝきなんひともとおひいてたりける（梅）

まず、A～Gを見てみよう。ここは、梅沢本の脱文を抽出したものだが、黒川本の脱文箇所は梅沢本に完全に一致していることがわかる。実際、黒川本の本文は、用字のレベルまで梅沢本との一致率が高く、両者は非常に近い関係

三手書入	筑波	阿波国	高松宮	天理	永禄	三手	岩国	相良	呉	黒川	梅沢	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	A
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	B
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	D
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	E
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	F
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	G
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	H
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	I
○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	J
○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	K
○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	L
○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	M
○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	N
○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	O
○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	P
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	Q
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	R
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	S
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	T
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	U
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	V
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	W
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	X
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	Y

	松岡	山口	山口書入	蓬左	竹柏園	内閣	静嘉堂	多和	伏見宮
A	○	○	○	○	○	○	○	○	○
B	○	○	○	○	○	○	○	○	○
C	○	○	○	○	○	○	○	○	○
D	○	○	○	○	○	○	○	○	○
E	○	○	○	○	○	○	○	○	○
F	○	○	○	○	○	○	○	○	○
G	○	○	○	○	○	○	○	○	○
H	○	○	○	○	○	○	○	○	○
I	○	○	○	○	○	○	○	○	○
J	○	○	○	○	○	○	○	○	○
K	○	○	○	○	○	○	○	○	○
L	○	○	○	○	○	○	○	○	○
M	○	×	○	○	×	×	×	×	×
N	○	○	○	○	×	×	×	×	×
O	○	○	○	×	×	×	×	×	×
P	○	○	○	×	×	×	×	×	×
Q	○	○	○	○	○	×	○	×	×
R	○	○	○	○	×	×	○	×	○
S	○	○	○	×	×	×	×	×	×
T	○	○	○	○	○	×	×	×	×
U	○	○	○	×	○	×	×	×	○
V	○	○	○	×	○	×	×	×	○
W	○	○	○	×	○	×	○	×	○
X	○	○	○	×	×	×	×	×	○
Y	○	○	○	×	×	×	×	×	○

にあると考えられる。[6]

続いてH～Lに目を向けると、呉本のみの脱文もあるが、相良本・岩国本は同一の系統と考えて差し支えはないだろう。全体的な本文の傾向を見ても、この三者に共通する異同は非常に多い。また、「二　奥書と章段」では、この系統に元亨四年奥書本の四本（三手本・永禄本・天理本・高松宮本）を含めて考えたが、本文のレベルで見ると、この四本は呉本の系統というよりも、後述する混淆態の本文である。

奥書・章段の様相を踏まえると、相良本に見えるような元亨四年の奥書と見出し（呉本系統）を残して、混淆態の本文を採用したという体のものが存在すると考えるべきだろう。

このように、梅沢本（黒川本）と呉本（相良本・岩国本）には各々独自の脱文が存在するのに対し、これ以外の諸本は、そのどちらをも兼ね備えた混淆態の本文である。この混淆態の本文を持つ諸本は四つに分類が可能である。

一つ目は筑波本・三手本書入本文・松岡本・山口本・山口本書入本文の弘安・正応年間奥書本である。M～Pを見ると、この系統のみが持つ本文があるが、それらは古写本である梅沢本・呉本の両系統に全く見られない。そうなると、この部分は増補されたものと判断すべきだろう。なお、これらの本の中で山口本は章段のあり方が呉本系統に近かったが、本文でもMを欠いており、他本とは少し距離がある。

二つ目は蓬左本・竹柏園本・内閣本・静嘉堂本・多和本・伏見宮本のグループである。Q～Yを見ると、多少のばらつきは存在するものの、他の諸本にはない欠脱がある程度まとまって見出される。従って、同一のグループにまとめて差し支えないと思われる。この中で、内閣本と多和本は最も近く、続いて蓬左本・静嘉堂本が同じ圏内にある。竹柏園本・伏見宮本は少し遠くなろうか。また、MNを見ると、弘安・正応奥書本の増補本文を蓬左本が取り込んでいるところがあるのがわかる。

これら二つのいずれにも属さないのが、阿波国本と相良本以外の元亨四年奥書本（三手本・永禄本・天理本・高松宮本）である。奥書・章段の有り様、及びここで取り上げた箇所以外の本文の異同の傾向から考えても、この二者は別に扱うべきものと考える。

四　総論

ここまでの分析をもとにすると、諸本には次のような系統分類を施すことができる。

第一類
　東京国立博物館蔵梅沢記念館旧蔵本
　ノートルダム清心女子大学黒川文庫蔵本[7]

第二類
　天理図書館蔵呉文炳氏旧蔵本
　東京大学附属図書館蔵相良為続筆本
　岩国徴古館蔵本

第三類

第一群
東京大学附属図書館蔵阿波国文庫本
第二群
筑波大学附属図書館蔵本
宮内庁書陵部蔵松岡本
山口県立図書館蔵本（書入本文を含む）
三手文庫蔵本書入本文
第三群
天理図書館蔵竹柏園旧蔵本
国立公文書館内閣文庫蔵林羅山旧蔵本
静嘉堂文庫蔵本
蓬左文庫蔵本
多和文庫蔵本
宮内庁書陵部伏見宮文庫蔵本
第四群
天理図書館蔵平仮名本
国立公文書館内閣文庫蔵永禄奥書本
国立歴史民族博物館蔵高松宮家伝来禁裏本
三手文庫蔵本（板本）

第一類・第二類はともに古写本の系統だが、それぞれに長文の脱文がある。長明の自筆本が存在しない以上、どちらがより古態を留めるのかは一概に判断できる問題ではないが、多少示唆的な異同も存在する。「近代哥躰」の段で、時代が下るに従って珍しい風情が得にくくなると説明される箇所を取り上げよう。梅沢本と黒川本の本文は、「こほりにとりてめつらしき意こをそへ」（梅・62オ）である。傍線部は意味が取りにくいが、前後が「雲のなかにさま〳〵の雲をもとめ」「にしきにことなるふしをたつね」なので、文意としては「氷を詠むに際して、珍しい意趣を添える」というようなものだろう。この傍線部は諸本では次のようになる。

こゝろ（呉・相・岩・三）、心（永・天・高・山）、心はかり（静）、意々（阿）、イロ（竹）、いと（内・多）、色（筑・松）、いこ（伏）

梅沢本が「意こ」とルビをふっているのは、「意」は「イ」と訓むべきという指示であろう。[8]「近代哥躰」では、この直後にも「むかしをへつらへる意こともなれは」（62オ）と全く同様の語が出てくるため、梅沢本書写者の誤写とは考えにくい。なお、こちらについては、諸本は、

こゝろ（呉・竹・静・三・天・高・山・松）、心（内・筑・岩・蓬・多・伏・永）[9]、意々（阿）、意々（相）、意こ（黒）

となる。これだけ諸本間で異同が出るということは、書写

者が文意を取れずに迷っているということだろう。梅沢本の「意こ」とその変形した形（「意々」「イロ・色」「いと」）か、呉本の「こゝろ」かというのが大きな差だが、「こゝろ」や「心」がそもそもの形であった場合、文意が通じないとは考えにくく、このような異同は生じないのではないか。

梅沢本の書写態度については、次のような箇所が参考になる。

a「マスホノスゝキ」（18オ）　まそうのいとをくりかけてと侍かとよ（を脱）

b「哥人ハ不可証得事」（43オ）　すゑの世の哥仙にていますかるへきうへに（本ノマヽ）

c「俊成入道物語」（47オ）　俊頼はまのなくおもひいたらぬくまなく（本ノマヽ）

d「仮名筆」（76ウ）　心のおよふかきりはいかにもやはらけかきてちからなき所はかなにてかく（ま脱）

aは三種の薄のうち「まそをのすゝき」を説明する部分である。親本に「まそう」とあるのでそのまま写したが、「まそを」の表記とあるべきかということだろう。dは和文においては出来る限り真名を使うべきではなく、仮名で和らげて書き、それができない所のみ「まな」で書くとあるべき部分である。この部分も、親本にあった「かな」をそのまま写し、「まな」とあるべきかということを傍記で表している。bcは書写者にとって意味が取れなかった箇所であるが、「本ノマヽ」忠実に書写している。このように、意味が取りにくい箇所や明らかに間違っている箇所も、梅沢本は本行本文でそのまま書写しており、親本に対してかなり忠実な書写態度を持っていると言えよう。

話を「意こ」に戻そう。このような梅沢本の書写態度を見る限り、梅沢本の親本（より執筆時に近い時期の写本）の段階では、本文は「意こ」乃至は「意」の字を含むものであった可能性が高い。この時、呉本の「こゝろ」は「意」を訓読した形だと考えられるが、ここからは、より積極的に意味を汲み取ろうとする書写態度が垣間見えるのではないだろうか。[10] 呉本の本文には、

e「哥ヲイタクツクロヘハ必劣事（38オ）
　しつのをかかへしもやらぬをやまたにさのみはいかゝたねをかすへき（諸本）
　　傍線部「しつのめ」（呉・相・岩・永）

f「道因哥ニ志深事」（51オ）
　優して十八首をいれられたりけるに……今二首をくはへて廿首になされたりけるとそ（諸本）
　　傍線部「廿八首」（呉）　点線部「卅首」（呉）

のように、長明の執筆段階ではあり得なかったと思われる箇所も存在する。[11] 梅沢本と呉本の古態性については、本文全体の精査をもって慎重に判断すべきものであるが、このような両者の書写態度を勘案すると、梅沢本により強い古態性を認められるように思う。

第三類は、第一類・第二類の混淆態の本文を持つ諸本である。第一群の阿波国文庫本は、本文全体を見渡すと、三類本の中で最も第一類の本文に近い。以下のような例が典型である。

g「隔海路論」（5ウ）　かのいそなる人をこのうみまてみわたす（梅・黒・阿）
　傍線部「このうらにて」（諸本）

h「近代哥躰」（68ウ）　をろかなるやうにてたえなることはをきはむれはこそ心もおよはす詞もたらぬ時これにておもひをのへ（梅・黒・阿）
　傍線部「ことはり」（諸本）

gは梅沢本の本文では、「あちらの磯にいる人をこの海まで見渡す」となり、意味が通じにくい。諸本の「この浦で見渡す」のほうがわかりやすいだろう。hは歌の徳を説明する箇所だが、歌は「愚かなようで優れた詞を極めるから、心も及ばず詞も足らぬ時に、歌で思いを述べ」とする第一類の本文では、「ことはをきはむ」「詞もたらぬ」と矛盾する事態になるが、諸本の「ことはり」（理）で解釈すれば、文意も取りやすい。阿波国本は混淆態本文であるにも拘わらず、このような箇所で第一類の本文を踏襲している。前述した「近代哥躰」の「意こ」の異同においても、阿波国本は「意々」という梅沢本・黒川本（第一類）に近い本文を採っていた。「二　奥書と章段」でも指摘したが、阿波国本は書写年代は下るとはいえ、第一類にかなり近い古態性を保った本文であり、注目すべきものだと考えられる。

第二群の弘安・正応年間奥書本は、本文の性質としては増補系であり、古態性においては劣るものだが、特筆すべきは、鎌倉時代においては伏見院や飛鳥井雅有の周辺、江戸時代においては契沖とその門下という、その享受圏である。契沖が当該系統の本を選んだのは、伏見院周辺での享受を物語った奥書が本文の価値を保証したということでもあろうか。伏見院サロンでの『無名抄』の享受は、伏見宮貞成親王（後崇光院）の『看聞日記』永享五年（一四三三）一〇月一四日条の記事、「十四日、晴、内裏和歌抄物御用之由被仰下之間、五帖進之、詠歌口傳秘抄（為秀卿自筆、累代秘蔵之本也）、詠歌大概・和歌十躰抄（大通院御筆）・僻案鈔・無名抄（鴨長明作）、五帖進了、…（後略）…」[12] に見える、貞成親王が「内裏」（後花園天皇）に進上し

た「無名抄鴨長明作」との関連も考えられて興味深い。

第三群は、竹柏園本や蓬左本のように書写年代が古いもの、二条派の定為の手許にあった本を祖とする伏見宮本のように素性のはっきりしているもの等あるが、残念なことには全体的に欠脱が多い。なお、竹柏園本は諸本中唯一、漢字片仮名交じり文であり、奥書にも見えるように寺院内で享受されている。第二群と同様、『無名抄』の享受の問題に関連する伝本である。

第四群は、相良本以外の元亨四年奥書本の諸本である。奥書・章段のあり方は第二類、本文は第三類第一群の特徴と重なる。『無名抄』の板本は全て同板ないしは覆刻であるから、この第三類第四群に含まれることになる。なお、前述の「近代哥躰」の「意こ」の異同において、第四群の諸本は全て呉本の本文と一致していたが、全体を通して、以下の如く、第二類の本文と一致する傾向が高い。

i「哥ヲイタクツクロヘハ必劣事」（37ウ）　なにゝてもなきこものになるなり（諸本）

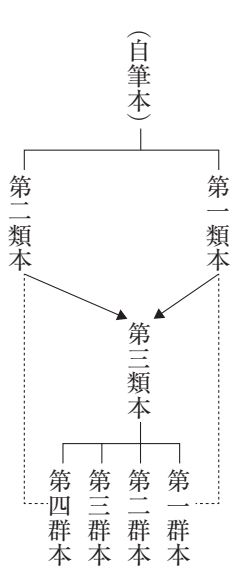
傍線部「物」（呉・相・永）「もの」（岩・三・天・高・山）

j「五日カツミヲフク事」（79オ）　あさかのぬまの花かつみといふ物あらんそれをふけ（諸本）

傍線部「あらは」（呉・相・岩・永・天）「あらば」（三・高）

従って、この第四群は、第三類の諸本の中では第二類に近い本文だと言える。

伝本の概況は以上の如くであるが、最後に系統を簡単に図示すると次のようになる。



今回取り上げることのできなかった伝本も数多くあり、本文の性質と享受圏の関係など、残された問題は多い。今後の課題としたい。

【注】

（1）久保田淳氏による復刻日本古典文学館『無名抄　梅沢本』（昭和四九年、日本古典文学会）の解題参照。

（2）『無名抄全講』（昭和五五年、加藤中道館）の底本となっている梁瀬一雄氏蔵本（応永一五年〈一四〇八〉橘遠房の書写）

も同様の奥書を有す。

（3）久保田淳氏は、前掲書（注1）で、三手本の書き入れについて「契沖の書入れの写しかと思われる」と指摘される。

（4）⑦の奥書の「たかつかさ」が「たかつ〇（か歟）さ」、「わなゝきいへる」が「わなゝき侍」、「乱侍めり」が「似（本ノマヽ）侍めり」となっている。また、「東宮」に「伏見院乎」、「弘安」に「後宇多院」と朱の傍書を施す。この異同は、朱の書き入れも含めて、山口県立図書館本の奥書と一致する。

（5）例えば、「寂蓮顕昭両人事」の章段では、長明の歌を詠み替えさせた人物について、本文中では「ある先達」としか記さないのに対し、見出しでは「顕昭」の名を充てる。

（6）久保田淳氏は、前掲書（注1）で、黒川本が梅沢本に「近いように思われる」と指摘される。

（7）黒川本は最終の二丁分が料紙・筆ともに別であり、この部分の本文は第三群第三類のものである。

（8）梅沢本では他に、「五日カツミヲフク事」の章段で「广官（チャウくわン）」とルビがふられており、訓みを指示するものである。

（9）永禄本の本文は「心こともなけれは」で、文脈が変わっている。

（10）呉本には補入・異本注記を表す傍記はあるが、「本ノマヽ」「…歟」等の傍記は存在しない。

（11）eについては、『季経集』の本文は「しづのをがかへしもやらぬをやまだにさのみはいかがたねをかすべき」（四）。「しづのめ」が「田」を「かへす」というのは、和歌では例を見ない。fについては、『千載集』における道因の入集歌数は二十首である。『千載集』の伝本は一系統に属すると考えられるため、呉本の誤写と見るべき箇所である。

（12）本文の引用は圖書寮叢刊『看聞日記』による。